

令和7年度第1回北九州市子ども読書活動推進会議 会議録(要旨)

1 日時 令和7年5月21日(水)14:00~15:30

2 場所 北九州市立子ども図書館 2階 大研修室

3 出席者

[委員] (敬称略)

山元 悦子、矢崎 美香、河井 律子、上満 佳子、小島 松美、黒田 玲子、
久間 猛、仲 紀子、尾場瀬 淳美、内藤 稚代、澤野 亜由美、鶴田 弥生
計12名

[事務局] 教育委員会 教育長 太田 清治 他15名

4 議事

(1)「北九州市子ども読書プラン(第4次北九州市子ども読書活動推進計画)」の
主要施策実施状況について

(2)「北九州市読書活動推進条例」について

(3)次期「北九州市子ども読書プラン(第5次北九州市子ども読書活動推進計画)」
の検討について(たたき台の提示)

【議事1】「北九州市子ども読書プラン(第4次北九州市子ども読書活動推進計画)」
の主要施策実施状況について

(委員) 資料1「地域(子育て関連施設・市民センターなど)における読書活動の
推進」の中の④文化施設等との相互協力のところで、北九州市にはたくさん
の文化施設があるため、文化施設と読書、図書館を結びつける何か
あればいいなと思う。

先日、いのちのたび博物館で、加古里子先生とのコラボ企画があった。
たくさんの親子連れでとても盛況だった。展示してある絵本を中心に、若
いお父さんもすごく興味深く見ていて、とても感激した。北九州市のいろ
いろな施設で、本による学びや、図書館に行って知的探求心を追求して
いくきっかけづくりになるのではないかと思う。

(委員) 文化施設等の相互協力で、何かをきっかけにしないと始まらないと思
うのだが、加古里子さんの展示はどのようなきっかけで、始まったのか。

(事務局) 加古里子さんの「絵本でたどるいのちのふしぎ」展では、絵本はもちろ
ん、加古里子さんが生物学や地学等を詳しく研究している方なので、それ
に関する書籍、子どもが見るような昆虫や動物など、自然に関する本をで

きる限り展示したいという申し出をいただき、子ども図書館から絵本を提供させていただいた。

(委員) 今後このような相互協力が広がるためには、それぞれの文化施設が宣伝をして、相互協力がますます広がるように働きかけるといいと思う。

(委員) 「子ども達がやる」ということを、もっとできないかなと考える。例えばボランティアの方が子ども達に向かって本を読むだけではなく、アクティブに動きたい子ども達が、ご高齢の方がいる施設やイベントなどで自分たちが発信する場があるとよいのではないだろうか。

また、タブレット活用の中に、読書通帳や読んだ本の紹介、朗読した本、ビブリオバトルに出たなど、スタンプラリーのような形ができると、継続性があり楽しいのではと思った。

次に、SNS 発信について、読み聞かせ動画の配信などがある。倍速で見ることが多いので、自分たちが音読をすることで、気づけることがあると思う。ただ情報を受け取るのではなく、自分たちが本を読む、という価値に気づけるきっかけになるのではないだろうか。ショート動画で調べ物のお手伝いや、全く本に関わっていない子ども達に届くような情報発信をお願いしたいと思う。

(委員) はじめての絵本事業において、以前の母子手帳と一緒に配布するということから、令和6年度からは、訪問時に配布する方法に変わり、進んでいると思う。

資料1 I 家庭における読書活動の推進の「①はじめての絵本事業の推進」、「②保護者による読み聞かせの実施」で、地域の読み聞かせなどのイベントのチラシも一緒に持って行って、推進するのがブックスタートの意味だと思う。①と②が繋がればいいと思った。

II 学校における読書活動の推進について、本を買ってもらえたり、親が子ども図書館に連れて来たりするのが難しい家庭もあると思う。学校図書館が子どもたちにとって、一番身近に平等にある図書館である。次の新しいプランには、「学校図書館の充実」というところに、重きを置いて欲しい。

条例について、「常に開館する図書館」ということで、北九州市には63名の学校図書館職員がいるが、63名というのは、中学校中心の63名であり、小学校も兼ねている。司書の方が来られない日は鍵が閉まっていたり、授業に使うときにだけ鍵を開けて使っていることがあるそうだ。「常に開館」という条例のところから外れている気がする。福岡市では、各学校1人司書を配置することを推進している。北九州市もこのような形になれば、もう少し学校図書館の充実が図れるのではないかと思う。

③授業等を通じた読書習慣の形成について、以前子ども図書館ができたときに、どの学校でどのような読書ボランティア(ブックトーク)の活動をしているか調べてもらったのだが、今の現状が把握されていない。全部の小中学校が、今どのようなボランティアが入って、どのような活動をしているのか状況を知ることによって、次のプランに生かされるのではないか。

(委員) ①と②の推進をできないかというところで、まずは読み聞かせとセットになっていたのが「はじめての絵本」のスタートだったと思う。配布率は上がっているが、皆さん記憶にないという現状がある。保護者に聞いても、あまりインパクトがないようだ。以前は、保護者の方が、「読み聞かせをしてください」と、図書館に持ってきたり、近くの幼稚園や保育園に持ってきたときに、読み聞かせをするのがセットになっていたと思う。特に今回の調査で、小学校低学年の間に、読書に親しむか親しまないかの差が、はっきり分かれているところがあった。乳幼児期の読書に親しむという体験がとても大事だと思う。家庭によっては、保護者の方が読み聞かせをしてもらっておらず、子どもにどうしていいかわからない、あるいは、その楽しさを味わっていないという方もいる。①と②をつなぐ方法として、もう少し間口を広げられるような取組があれば、協力していきたい。

(委員) 子ども図書館では、フロアワークという仕事がある。司書の方が、子どもたちから「読んで」と言われたら読んであげるといふ、1つの仕事として位置付けられているものだ。実践しているところはあまりないが、遠慮せずにお願いができるといいと思う。チラシなどに、「図書館に行って司書の人に声をかけて読んでもらってね」などを入れるといいと思う。

(委員) 最初の頃は、「初めて本を読むおはなし会」というのも、図書館で実施されていた。実際に図書館の利用者が減っている、昔に比べておはなし会に来る乳幼児と保護者の方が減っている、という現状がある。初めて子どもを持ったお母さんと子どもに、読み聞かせを通して、周知とすることが必要だと思う。

また、司書が、司書の専門性をしっかり発揮していかなければいけないと思う。業務が多いので、読書ボランティア団体の中のお手伝いできるグループなど、もっと外の手を借りたらよいのではないだろうか。

資料1-4の⑤。「子どもが集まる商業・レジャー施設などの協力の検討」のところで、様々な分野とコラボするとよいのではないか。コラボをすると、加古里子展にたくさんの人が集まったように、読書をしない方々も図書館に来るようになると思う。コラボをするときに、必ず読書に繋がることを絡めないといけない。なぜこれを図書館でするのか、という点で、

コアな読書好きな方からすると、疑問が湧く点があるかもしれない。必ず本を組み合わせ、図書館の外の方々の力も、借りていくことも必要だと思う。

(委員) 全体的に見て、A評価がすごく少なく、B評価が多い。継続的に何をしたというのは紙面からわかるが、第4次で具体的に何が問題でできなかったのか明確にする必要があると思う。具体的に本市において何が一番問題なのか、なかなか成果が伸びないその根本的な問題は何か、もう少し洗い出したほうがいいのではないかと。第5次に向けて、全部A評価にするぐらいの勢いで進めたらいいのではと思った。

(委員) 今後このような方向に、すべきだという展望、方向性という視点から、もう一度洗い直し、それを第5次につなげるということが、この第4次の進捗状況分析には、大変必要なことだと思う。

【議事2】「子ども読書活動推進条例」について

(委員) 「子ども読書活動推進条例」について意見をいただきたい。

先ほど、学校図書館について「常に開館する」という条例の内容に実態が伴っていないという意見があったが、条例そのものに関しては特段意見がないようである。後程思いついたことがあれば意見をお願いしたい。

【議事3】次期「北九州市子ども読書プラン(第5次北九州市子ども読書活動推進計画)」の検討について(たたき台の提示)

(事務局) 今までの計画期間は5年間だったが、第5次の計画期間は令和8年度から令和10年度の3年間とする。現行の子ども読書プランまでは、国の子ども読書活動推進に関する基本的な計画から3年遅れて、次期計画へと移行していた。第5次子ども読書プランの計画期間を5年間から3年間とすることで、第6次子ども読書プラン以降は、完成した国の基本計画を参考に、国の考え、施策などをより明確に反映させながら、次期読書プランの策定作業を行い、国の翌年度からスタートするというサイクルに調整したいと考えている。

次期プランの目指す姿は、現行「読書プラン」の「すべての子どもが、日々の生活の中で進んで本を手にとって読み、子ども同士や家族などと楽しく語り合う日常」を変更せず継続する。また、新たな3つの方向性を具現化するための取組みの方針は、現行「読書プラン」を一部変更し、主に子どもの読書に関わる場所、「家庭、学校、市立図書館、地域」ごとに分類し取組みの方針を今後定め、主要施策を考え実施していくことになる。

(委員) アンケートをもとに、そこから政策を展開するというのは有効だと思う

が、このアンケートはどのようにとられて、どのような規模の学校、生徒たちを対象にしたのか。

(事務局) 区ごとに、学校をランダムに選んで、小学校5、6年生とその保護者、中学校2年生とその保護者、高校2年生に対してアンケートを行った。令和7年1月末日で、学校にお願いしている。

(委員) 誰に教えてもらったわけではなくても、何となく読書の目的や意義などを、子どもたちもしっかり感じていることがわかる。貴重な資料だと思った。本を読む子どもを増やし、図書館利用者を増やすためには、根本的に国語指導とは別に、「読書指導」と「図書館利用指導」この2つが必要だと思う。この読書指導と図書館利用の指導をどちらもできて、すべての子どもたちにそれを手渡すことができるのは、学校司書だと思う。例えば小学校、中学校、高校の1年生のときに、読書指導と図書館利用の指導を行う。加えて、小学校は一番読書指導の基本的な時期なので、4年生あたりでも、再度、読書指導、読書の意義と目的を指導する必要があると思う。根本のところをしっかりと押さえておかないと、なぜ読書をしなければならないのか、読書の何が楽しいのか、将来何の役に立つのかがわからない。本を読むだけが読書ではなく、パソコンの画面を読む、会社に入って書類を読むなど、すべてのことは読書につながるので、読書指導というのは大事だと考える。

(委員) 読書指導や図書館のガイダンスというのは学校の仕事ではあるが、そこに図書館の方から踏み込んで、例えば出張で図書館利用指導することが必要だと思う。

(委員) 図書館利用について、以前はすごく学校でも取り組んでいたが、少なくなっている気がする。担任だけで取り組むのではなく、学校図書館職員と日程を合わせながら行うことで、専門性が生かせるなどの良い点がある。

(委員) 大学で司書過程を教えているが、大学の授業の中だけでは限りがあるので、必ず現場を見るということで、こちらの図書館にも毎年お世話になっている。見学することによって、今まで気づいていない見え方や、利用の仕方などが直に伝わる。

各学校にはPTAという団体がある。保護者も読書率が上がっていないということは、子どもの読書率が上がらない原因になるので、PTAでも、研修会に参加していただきたい。そうすると、学校と図書館、学校司書という3つの連携による、強固な読書活動に繋がっていけるのではと思う。

それぞれのところがバラバラに動いていて、うまく連携ができていないように感じる。読書活動というのは生涯学習の一環として、本人にとつ

てなくてはならない知識だ。大人になるまで繋がるような活動にしていけたらいいと思う。

(委員) 読書活動を推進するにあたり、一番基本は人だと思う。人員を増やしていく、その方策を提言していくことがとても大事だと思う。すべての学校図書館に司書をおくことを実現していく、そのための努力をしていくことが大事だと思う。やはり、熱心な司書が学校にいと、子どもたちが昼休みに大勢やってきて本を見る。そう考えると、いつ先生が来るかわからないとか、今日は閉まっているとかではよくない。毎日開いていて、子どもと対面して、子どもの読書の興味を把握することが大切だと思う。3年間で全部に人を配置するのは難しいかもしれないが、3年後の第6次には組み込む方向で、行政的にも動いていただきたい。

今、人件費がどんどん値上がりしている。学校司書の人件費の安さは目を覆うような状況にある。優秀な人材には適切な人件費を払わないと、集まってこない。

また、居場所づくりということで、公共図書館を居場所にする試みが各地で行われている。おしゃべりをしたり、音楽を流したり、そういう場であってもよいのではと思う。色々な図書館で、「サイレントルーム」を作っている。そこは静かになくなくてはならない場所だが、それ以外の場所は、おしゃべりをしても音楽を流してもよいという、「やわらかな空間」にするのが発想の転換だと思う。

次に、連携ができていないことに関しては、同感だ。これだけの成果を上げているにもかかわらず、今ひとつ、うまく進んでないと思う。例えば、ボランティアと学校図書館及び、ボランティアと公共図書館の連携はすでにできている。そこで留まっているから、先に進まないと思う。今ある部署だけではなく、広い視野で連携を広げていく仕組みができていけば、次に進めると思う。

(委員) 「連携」に関して、私は、地域学校協働活動推進員として活動しており、義務教育の間に、家庭と学校と地域で子どもを育てる、そして学びを支えようということで、「コミュニティスクール」を進めている。絶対に必要なのが、子ども読書活動推進のために、地域の大人は何ができるか考えることだと思う。例えば、地域の方が、司書がない開いてない図書館を、ボランティアで開けることがあるかもしれない。今後、中学校の部活が地域移行していく中で、この市立図書館における地域クラブ「子ども読書クラブ」の設立に、地域の大人が関わることがあるかもしれない。

主要施策の中に、やはり「コミュニティスクール」という文言を入れていただきたい。子どもの読書活動の推進に向けて地域全体が考え、取り

組んでいくことを目指したい。

(委員) 「コミュニティスクール」は、第5次のプランのたたき台ではどの主要施策に入るのか。

(事務局) 地域の、子どもの読書活動を進めるということなので、「地域における読書活動の推進」に入るのではないか。

教育は行政の中だけでは限界がきている。外の力を借りるというのは、学校教育でも当然のように行われていたことだ。今PTAの活動などが非常に難しくなっているが、外の手を借りることこそが連携であり、そのうちの一つが地域コミュニティである。

それぞれの施策の連携というところに関して、資料6が、「家庭」「学校」「図書館」「地域」という書き方になっているので、それぞれが分断しているように見えるが、それぞれが単独にやっても、全く何の力も発揮しないということは、我々も重々理解している。いかに子ども図書館が旗を振ってマネジメントするかが、大きな命題だと思っている。真摯に受けとめて、施策に生かしていきたい。

(委員) 資料1 進捗状況の反省のところ、Aが少なく、Cもあるということに関して、横の連携を強化していくことが必要だと思う。読書プランを作ることが目的なのではなく、読書プランを1つ1つクリアすることが目的である。

子ども図書館が創立するときに、「子どもたちが自ら活動していく図書館」を目指そう、という目標を掲げていたので、子どもたち自身が、子ども図書館の中で生き生きと活動していく図書館を目指してほしいと思う。

Cというのが、資料1-5、「ティーンズ層の取り込みなど」の部分。第5次では、中高生が自分たちで活動する、ということを追っていき体制が確立できたらいいと思う。

(委員) 電子図書館の利用に関して、資料5のアンケートを見て、非常に残念なのは、電子図書館の利用率が低いこと。前回の会議のときに、電子図書館を活用している小学校が1校だけ突出してあり、やはり授業等で活用したか、という分析がされていたと思う。その次の段階として、その活用方法を授業で教えていただきたい。

また、地域クラブに関して、子ども図書クラブの設立も、部活の地域移行に伴って、ぜひ進めていただきたい。

(委員) 第5次読書プランの中に、追加で「各発達段階における重点方針」が入ったことは、うれしく感じている。乳児期が、「家庭」というところに特化されている感じがしていたのだが、乳幼児期の早期に、本に親しむ習慣がつくよう関係機関相互の連携を深める、というところが、ありがたいな

と思う。小学生でも図書館に行ったことがない、家庭的に図書館に行けない、その楽しさがわからない、という子どもがいる。可能であれば、幼稚園や保育所、子育て関連施設等から、市立図書館や学校図書館に連れていく機会ができればいいと思う。

(委員) 北九州市の学校に勤めて30年くらいになる。小学校2年生の子どもたちと、生活科の勉強の一環として図書館を訪れたことが何回かある。図書館に行ったことがない子どもにも、いい機会を作ることができたなど思っている。それが保護者に、つながればよかった。人、もの、お金の問題もあると思うので、その中でどのようにしたら一番簡単に早くできるのかと考えていた。今は、タブレットで本が読めるので、タブレット活用を進めるとよいと思う。利用促進のために、学校図書館職員が手助けできたらいいと思う。学校図書館職員がいても、効果的に人材の活用ができていない状況もあり、コミュニケーションをとって、広がっていければいいと思う。

(委員) 有意義な議論をありがとうございました。